

本研究は、謙讓表現である「させていただく」を主な題材として論じたものである。本論文は、本文が全 11 章からなる三部構成をとり、検討を進める。各章で検討した内容は以下のとおりである。

序論である「理論と分析の枠組み」は、第 1 章から第 3 章までであり、本研究の前提となる研究の目的や研究史的な背景、また、理論的背景について述べるものである。

第 1 章では、諸学者における敬語の概念やその性質について論じたものを整理するとともに、時代の流れによる敬語意識の変化が、「させていただく」の使用にどのような影響をもたらすのかについて把握する。その上で、本研究における問題意識を提示する。

第 2 章では、先行研究を概観し、従来の研究で何が明らかにされたかを考察しつつ、既存の研究で見過ごされたことや問題点について検討する。

第 3 章（本章）では、本研究における目的や意義を明示する。また、本研究の方法論について紹介するとともに、本論文の構成について述べる。

第二部である「「させていただく」に関する意識調査と実態調査」は、第 4 章から第 11 章までであり、第 3 章で提示した研究方法をとり、「させていただく」に対する意識調査（第 4 章・第 5 章）と実態調査（第 6 章～第 10 章）を行った結果について分析し、「させていただく」の変化の様相について考察する。

第 4 章では、菊地（1997）の四分類のみでは、現在使用されている「させていただく」の全ての性質の説明ができないということを指摘しつつ、この表現に対する日本語母語話者の意識を確認するため、アンケート調査を行った。調査の際には「させていただく」の「拡大表現」を主として全 18 例を提示し、それぞれの表現に対してどのように感じるのかについて尋ねた。この章では、その結果を分析し考察を試みる。

第 5 章では、外国人日本語学習者を対象とした「させていただく」のアンケート調査の結果を日本人母語話者と比較分析し考察を試みる。筆者も外国人日本語学習者であるため、これまでの経験上、「させていただく」という表現は、「丁寧な言い方をしたいときに用いる表現」という教育しか受けたことがないことがこの章の背景となる。また、本来「謙讓語Ⅰ」である「させていただく」（菊地 1996）が、「謙讓語Ⅱ」のような用法として変わりつつあるのが現状であるにもかかわらず、現状を反映しない教科書や指導法は、学習者と日本人の相互間の円滑なコミュニケーションに、支障が生じやすいものとして考えられる。したがって、このような用法の変化の中で、外国人日本語学習者の「させていただく」に関する認識はどのようなものなのかを調べるために、比較調査

を行う。その分析においては、主に、日本人母語話者と異なる傾向が見られるところに重点をおいて考察し、それについて述べる。

第6章では、「させていただく」の使用実態を調べるために、参議院の予算委員会の会議録から第1回国会（昭和22年：1947年）から第169回国会（平成20年：2008年）までの期間を研究対象として、この期間内での「させていただく」の入った文を抽出し、全数調査と上接語の調査を行う。この調査結果を基に、「させていただく」使用の増減と表現の性質がどのように変化してきたのかを確認し、「させていただく」の用法が拡大していくことと結びつけて分析することを試みる。本章では、その分析内容について論じる。

第7章では、第6章と同様の方法を利用して調査を行う。ただし、第6章は、参議院を対象とした調査であったのに対して、第7章は、衆議院を調査対象とし、衆議院における「させていただく」の使用の変化を観察し分析した内容について述べる。

第8章は、「いたす」と「させていただく」の交替可能性について述べたものである。この章では、「いたす」の使用における諸問題により、「させていただく」の使用が急増するようになったという先行研究を踏まえ、実際の使用においても、そのようなものとして捉えられるかということを確認するため、調査を行ったものである。調査方法は、第6章・第7章と同様の方法を取り、『国会会議録検索システム』を利用し、予算委員会の第1回国会から第169回国会までの約70年間の「いたす」と「させていただく」文を抽出し、その使用の推移と上接語の使用の変化を観察する。その結果を基に、両者の使用における交替可能性を主張するとともに、これらの表現が交替することによって、「させていただく」の使用が増加するようになったと論じるものとする。

第9章では、第6章から第8章までの考察を踏まえ、参議院と衆議院の「させていただく」使用についての比較分析を行い、この両者の使用における相違点を明らかにする。

第10章「させていただく」の使用の増加と用法の拡大の一因となるものとして、「お／ご—させていただく」という表現を挙げ、この表現について、調査し分析を試みる。本章では、第6章～第8章と同様の調査方法を取り、『国会会議録検索システム』の予算委員会を利用し、第1回国会から第169回国会までの約70年間の「お／ご—させていただく」が入った文を抽出し、分析を行う。その分析に当たっては、第8章と結びつけて、「お／ご—させていただく」は、「させていただく」が増加していく過程の中で、接頭辞である「お／ご」と謙讓表現である「お／ご—いたす」の影響により出現したものであるという観点から分析を試みる。

終論である第11章では、各論によって得られたものを整理し、総括する。